

# ポイント45

2007(平成19)年2月22日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



監督・脚本=ゲイリー・レノン/出演=ミラ・ジョヴォヴィッチ/アンガス・マクファーデン/スティーブン・ドーフ/アイーシャ・タイラー/サラ・ストレンジ (ムービーアイ、東宝東和配給/2007年アメリカ映画/96分)

## 第3章

### ヒロインの個性・職業も千差万別

……『バイオハザード』などで「強い女」を演じているミラ・ジョヴォヴィッチが大変身し、「アレ」が大好きな女、DVで苦しむ女、そして45口径と「唇とヒップと乳房」という女の武器でクールに復讐する女を熱演！ もっとも、筋肉質のミラの胸は意外と貧弱で、「鮮烈なエロティシズム」は誇大宣伝……？ したがって、その手の期待は裏切られるかもしれないが、ミラの新境地であることは確か。しかして、彼女の今後の路線設定は……？

## 変身！ ミラ・ジョヴォヴィッチ！

『フィフス・エレメント』(97年)で注目を浴び、『ジャンヌ・ダルク』(99年)の主演で中性的な魅力を存分に発揮したミラ・ジョヴォヴィッチは、その後『バイオハザード』(02年)、『バイオハザードII アポカリプス』(04年)、『ウルトラヴァイオレット』(06年)の3本で、「強い女」を演じ続けている。しかし私は、彼女がこのような型にはまった役を演じ続けることに賛成できず、彼女の強烈な個性にマッチしたいい作品に恵まれることを望んでいたもの。

そんな中、この『ポイント45』が登場したが、ここで彼女は短気で手に負えない危険な男アル(アンガス・マクファーデン)の情婦キャット役を演じている。キャットは、アルに内緒で拳銃をさばいたことがバレたため、アルから手ひどい虐待を受け、遂にその復讐を実行するという複雑で恐い役柄に挑戦している。

この映画はR-15指定とされているうえ、チラシや案内文には、「鮮烈なエロティシズムがほとばしる、濃厚なラブシーン」「ミラが体当たりで演じるヒロイ

ンのエロティシズム」とあるから、その方面(?)にも期待! さらに、「女の武器は45口径より危険」とあるから、ミラが見せるであろう女の恐さにも期待! さて、ミラの『バイオハザード』からの変身ぶりは……?

## 男のアレによって、女は……?

この映画は、大映しにされたミラ扮するキャットが、アルとの生活と自分の夢、そしてアルとの濃密な性生活を大胆な言葉で露骨に告白するシーンから始まる。2人が生活しているのは、ニューヨークの吹き溜まり“ヘルズキッチン”というスラム街。そして2人の仕事は、拳銃の密売と盗品の売買というセコイもの……?

アルは凶暴でわがまま、そして短気で危険な男だが、そんなアルにキャットがホレているのは、「あの方面」が強いためらしい。したがって、冒頭キャットが語る「ビッグ・アル」の話は半分自慢話で、自分のセックスも良くてたまらないらしい……? したがって、将来はいつか海辺に家を建てて住みたいというキャットの夢の実現は、今のような生活では無理なことはわかっている、アルと別れられず、毎日似たようなショボイ生活を続けていたが、それもこれもビッグ・アルのアレがいいから……?

ヤクザにはよく、「なぜあんな美人が……」と思うような女性が甲斐甲斐しく世話しているケースがあるが、それはこのキャットと同じように、彼女が完全に彼の「性の奴隷」となっているせい……?

## 良くも悪くもアメリカ的……

この映画は登場人物が限定されているため、複雑な人間関係が展開されるにもかかわらず、ストーリーの骨格がわかりやすい。スラム街で拳銃の密売をしている主人公という設定もアメリカ的なら、キャットの親友のヴィック(サラ・ストレンジ)がレズビアンで、キャットに対してさかんにちょっかいを出していたり、夫の虐待から立ち直って今はソーシャルワーカーの仕事をしている黒人女性リズ(アイーシャ・タイラー)も、いつしかキャットとのレズビアンに走っていくところも、自由の国アメリカらしい(?)人物設定。

さらに、アルの幼なじみで、今は普通の仕事に就こうと努力している男ライリ

ー（スティーブン・ドーフ）も実はキャットにホレていたから、アルとキャットを中心とし、そこにヴィック、リズそしてライリーの3人が絡んだ人間模様はかなり複雑で、心理的葛藤もさまざま……。

スラム街を舞台としているだけに、言葉遣いもかなり汚く、コトあるごとに「Fuck……」と使われている。そんな乱れた言葉づかいも含めて、この映画は良くも悪くもアメリカ的……？

### この映画のタイトルは……？

『ポイント45』というタイトルだけではサッパリ訳がわからないが、これはアルが自分の名前で登録してある45口径の拳銃のこと。アメリカが銃社会であることや、それを改めようという動きのあることはよく知られているが、かつて豊臣秀吉がやったような「刀狩り」は自由の国アメリカでは容易に実現せず、アルのように登録した拳銃を所持している者は多い。護身用として「一家に一丁」という常識が今どうなっているのかは知らないが、アルのような危険な仕事をしていれば拳銃は必需品……？ しかし、もしそれが悪用されたら、その責任は登録人に……？ もっとも、そんな悪用ができるのは、アルのすぐ身近にいる人間だけのはず。すると、もしアルの名前で登録している45口径の弾丸によって誰かが殺されたとしたら……？

### ドメスティックバイオレンス場面の迫力は……？

フリー百科事典『ウィキペディア』によれば、ドメスティックバイオレンス（domestic violence、DV）とは、「狭義には、同居関係にある配偶者や内縁関係にある家族から受ける家庭内暴力のこと」だから、この映画の中でアルがキャットに対して加える手ひどい身体的暴力は、まさにこれ。

キャットがヴィックと共にアルに隠れて、アルが最も嫌うプエルトリコ人に拳銃を密売したことがバレたら、そりゃアルが怒り狂うのは当然。しかし、キャットがプエルトリコ人の男と口をきいたからとか、男から髪に手をかけられたからとかという理由だけで怒り、暴力を振るうのは、嫉妬心丸出しの小心者の男のやることで、かなり見苦しいもの……？ アルがキャットを心の底から愛している

ことは事実のようだし、キャットを手離したくないと思っているのもホント。しかし、自分で自分の言葉に酔うかのように、殴っては謝り、謝っては殴り、遂にはナイフを持ち出してキャットの髪の毛を無茶苦茶に切っていく姿を見ていると、そりゃ被害者の恐怖心は想像を絶するもの……。

こんなDVの恐怖にさらされる女キャットを、あの強い(?)ミラ・ジョヴォヴィッチが見事に演じている。もちろん、演技の前にはアルを演ずるアンガス・マクファーデンは、ミラに対して「ゴメンね、役柄上仕方なくやるのだからネ」と謝っているのだろうが、やられる方にしてみれば、事前にわかっているもやはり恐いのでは……？

そんな風に思うほど、このDV場面の迫力はすごいもので、DVの名場面として記憶されるのでは……？

### 「鮮烈なエロティシズム」は誇大広告……？

チラシでもプレスシートでも、黒い網タイツに包まれたミラ・ジョヴォヴィッチの長い長い足が強調されているうえ、妖艶な表情でのキスシーンや大胆な下着姿でのベッドシーンの写真が載せられているから、私はこの映画の宣伝文句である「強烈なエロティシズム」に大いに期待していたが、残念ながらそれはほとんど空振り……？

アルとキャットの濃厚なベッドシーンもほとんどないうえ、キャットとヴィックそしてキャットとリズとの妖しげなレズビアンシーンも実は全くなし。しかして、それはなぜ……？

この映画で私がした一大発見は、ミラ・ジョヴォヴィッチは巨乳でないことはもちろん、標準サイズにも至っていない、かなり貧弱なバストだということ……？ その理由は、多分彼女が女性にしてはかなり筋肉質な身体だということ……？ もちろん、こんな私の見立てがどこまで正確かはわからないが、唯一登場する乳首バッチリのシーンを見れば、ほぼまちがいはないはず……？ したがって、『失楽園』(97年)で黒木瞳が、『愛ルケ』(06年)で寺島しのぶが見せたような大胆で濃厚なベッドシーンは、所詮ミラ・ジョヴォヴィッチには無理……？ したがって、「強烈なエロティシズム」も、実は誇大広告……？

## 唇とヒップと乳房を武器に……

この映画には刺激的なセリフがたくさん登場するが、それは自ら脚本を書いたゲイリー・レノン監督の文章力が冴えているため。プレスシートの中にある監督インタビューによれば、「シナリオを書き始めたら、文章は自然に湧き出してきたんだよね。最初のシーンを描き終わるとすぐ残りが浮かんだんだ」と話しているように、この映画のストーリー展開にはよどみがなく、きわめてスムーズ……。

「唇とヒップと乳房を武器に……」というセリフは、実はアルのキャットに対するDV「事件」について、キャットのケアを担当しているソーシャルワーカーであるリズのもの。

聞き方によってはかなり恐いセリフだが、リズ自身が暴力を振るう夫と離婚し、現在の立場を築くについてモットーとしてきた言葉……？

当初はこのリズやヴィックから、「アルから早く逃げなさい」「アルを告訴しなさい」といくら説得されても首をたてに振らなかったキャットだったが、ある日を境にキャットの決意が固まった様子。そしてそれには、リズのこのセリフが大いに役立ったよう……？ さて彼女は、このセリフを現実にとどのように活用する策略を描いているのだろうか……？

## なぜ女も騙すの……？

「眩い美貌と肉体を武器に、NY アンダーグラウンドを生き抜く衝撃のサスペンス・ドラマ」というこの映画の宣伝文句どおり、映画後半はミラ・ジョヴォヴィッチ扮するキャットが人が変わったようにクールにその目的を達成していく姿が描かれる。といっても、キャットによるアルの「はめ方」はしごく簡単なもの……？

だって、45口径の拳銃には当然アルの指紋がついているから、アルのトレードマークであるジャケットを着て、彼の45口径でスラム街のチンピラの1人でも撃ち殺し、その姿が目撃されることを計算しながら逃走すれば、おおむねアルはおしまい……？

ところが、そんな彼女の冷たい計算を見抜けないアルは、面会に来たキャットに対して「俺のアリバイを証明できるのはお前だけだ。あの日俺とお前は……」

などと語ったが、それに対するキャットの答えは、「私は覚えていないわ!」という冷たいもの。これだから女は怖い。そして、女は怖いということをアルはもっと早く思い知るべきだったのだ……。

そこまでは私もゲイリー・レノン監督が書いた脚本の意図を十分理解できるつもりだが、キャットがなぜレズビアン仲間であるヴィックやDV対策のために協力してくれたリズまでも裏切らなければならなかったのかは、私にはよくわからない。だって、キャットのセックス好きは生まれつき、もしくはアルによって仕込まれたもの……。そしてキャットは「両刀使い」らしいから、アルと別れてしまった後は、レズ仲間としてヴィックやリズが必要だったのでは……？

私はそう思ったのだが、映画を観ていると、キャットは今や完全に自立して拳銃密売の商売をしっかりとこなしている様子。そしてラストに至り、映画冒頭に登場したキャットのインタビューの画面が再現され、それが次第に遠映しになっていくと、そこは海辺。つまり、今やキャットは、自分が夢に見た海辺の家を手に入れているというわけだ。すると、キャットはリズから得たあの助言、つまり「唇とヒップと乳房を武器に……」をリズ以上にうまく活用して自分の夢を実現させたということ……？

もしそうであれば、この映画はある意味キャットのサクセスストーリーを描いたもの……？

2007(平成19)年2月23日記